

インドネシアにおける Competency Based Curriculum の実践

中 矢 礼 美 (広島大学)

はじめに

本稿は、インドネシアにおける最新カリキュラムである「2004年カリキュラム」の実践を分析し、その特徴と課題を明らかにすることを通して、わが国のカリキュラム開発に示唆を得ることを目的とする¹。この新カリキュラムは、コンピテンシーを基盤として開発することを第一の特徴とすることから、「コンピテンシーを基盤とするカリキュラム (Competency Based Curriculum)」とも称されている。コンピテンシー概念は、PISAにおけるキー概念となっていることから、近年世界的に注目されており、中央教育審議会でも PISA のキー・コンピテンシーを参考にした「生きる力」の具体化・明確化・体系化の審議が行われている²。したがって、コンピテンシー概念を基盤として開発されたカリキュラムおよび実践課題について検討することは、わが国における「生きる力」を育成するためのカリキュラムのあり方を議論する際に、重要な示唆を提供すると考える³。

1. インドネシアにおける Competency Based Curriculum の特徴

コンピテンシーは、学問分野や国によって多様な概念があるが、OECD は「単なる知識や能力だけではなく、技能や態度をも含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求 (課題) に対応することができる力⁴と定義している。コンピテンシーという概念は日本では90年代から特に経済分野において用いられてきたが、そこでも単なる知識や能力を有すること (保有能力) から実践能力 (あるいは成果をあげる行動特性) への能力観のシフトが強調されてきた。

このコンピテンシー概念を基盤とする教育の萌芽は、1960年代に遡る。その基本的原理と目的は、成果重視、職場との関連性重視、観察可能なコンピテンシー評価の重視、スキル認識の改善および単位の修得と学習転移の改善である⁵。これらの点は、わが国において議論されている教育目標の明確化・体系化や評価のあり方について示唆に富む。つまり、「成果重視」「職場との関連性重視」は、教育目標を決定する際に、生活・職場・社会において必要とされる教育の成果とは何を示すのかといった具体性、誰がそれをどのように決定するかといった正当性を高める点において示唆的である。「観察可能なコンピテンシー」「スキル認識の改善」は、何をどのように評価すればよいかといった評価方法の見直しにつながる。「単位の修得と転移の改善」は、学校教育で育成・向上された「能力」と学校外教育あるいは学校教育後の学習における連続性を高め、生涯学習システムの構築に寄与すると考えられる。

本研究では、これらの特徴とコンピテンシー概念の特徴である「保有能力ではなく、実

実践能力（あるいは成果をあげる行動特性）の重視」に注目しつつ、それが初等中等教育段階においてどのように実現されるのか、インドネシアのナショナルカリキュラムと教員が開発したカリキュラム（教授計画）および授業実践を通して検討する⁶。

インドネシアは、コンピテンシーを「日常的な思考や態度の中で具現化される知識、スキル、態度および諸価値から構成されるもの」と定義し⁷、ナショナルレベルでカリキュラムフレームワークとコンピテンシー基準を設定している。カリキュラムフレームワークは、国家教育目標の下、学校段階別目標としての卒業時の生徒に期待されるコンピテンシー、カリキュラム横断コンピテンシー、教科別コンピテンシースタンダード、教科別・学年別のコンピテンシースタンダード、基礎コンピテンシーおよびその評価指標となっている。これらについては教育省が決定し、各教科別の『手引き書』⁸において学習内容、評価指標、教授学習活動の留意点などが事例として示されている。教師はそれを参考にして、学校や生徒の状況に合わせた評価指標、学習内容、活動、配分時間、教材等を含めたシラバスおよび単元別教授計画を編成する。

コンピテンシースタンダードとは、「教科において行われる、あるいは習得される能力。生徒が身につけておかなければならない特定教科におけるコンピテンシー。教科の中で卒業生が身につけていなければならない能力」、基礎コンピテンシーとは「卒業生が身につけていなければならない教科の中の最低限の能力。教科のコンピテンシースタンダードから考えられる、生徒が行うことができるあるいは習得されなければならない最低限の能力」と定義されるものである。そしてこの基礎コンピテンシーに基づいて評価指標が開発される。全ての段階においてコンピテンシーを基盤してカリキュラムが開発される点において、学校教育における学習の成果と実社会との連続性・転移可能性を促進する可能性を高めようとしているといえよう。またそこでは、細部化する方向のみでなく、各教科で育成したコンピテンシーを横断してどのようなコンピテンシーの育成が目指されるべきかを提示している。この構造は、中教審での論点「もう一段具体的なレベルでの育むべき目標を設定し体系化することにより、わかりやすく」「各教科等で育むべき力、例えば、「自ら学び自ら考える力」については、目標とすべき水準を明確化し共通理解とすることが難しいので、範囲や程度を明確にするために、教科横断的な類型化、具体的な活動例の提示などの工夫」に参考になる。

カリキュラム開発原則をみると、その一つとして「生きる力の育成」を掲げている。「生きる力は、読み、書き、算のリテラシー、パーソナル・スキル、合理的な思考スキル、社会的なスキル、学問的スキル、職業的スキルからなる。適応的で、創造的で、協力的で、競争的な活動を通して育成する」と示している⁹。日本における「生きる力」の概念と比較すると、思考力にも「合理的」であることが期待されていること、「職業的スキル」を示して実社会との関係性を強く志向していることなどが異なっており、またその育成方法として「競争的活動」などが挙げられている点も興味深い。中教審では「保護者の学力低

下への懸念を払拭するためには、義務教育における基礎的・基本的な知識・技能とは何か、体系的に理解できるよう整理」が議論されているが、インドネシアのカリキュラムでは、基礎的・基本的な知識と技能は「学習内容」を見れば幼稚園から高等学校まで一目で分かるようになっている。中教審の論点4「指導上、児童生徒の発達段階ごとに重視すべき点、教育内容の特質ごとに留意すべき点」についても、各教科毎に学年別のコンピテンシーマップが作成されている点で参考になろう。

2. 教師によるカリキュラム開発の特徴と課題

—「公民教育」科の授業計画より

本研究で事例として取り上げる第7学年公民教育科のコンピテンシースタンダードは、「地方分権化時代の社会参加、国家の法律や法規、人権国家委員会、意見表明の自由および独立宣言や当初の組織の再構築について情報を探し、伝え、利用することが日常的にできる」である。「日常的にできる」が、保有能力でなく実践能力への高まりの重要性を示している。そして基礎コンピテンシーは、「1. 意見表明の自由について分析することができる」「2. 意見表明の自由に対してポジティブな態度をとる」となっている¹⁰。教育省は『手引き書』において指標事例としては、二つの指標（「意見表明の自由について説明する」「正しく、責任ある方法で意見を表明することを尊重する」）を示していたが、A教諭は五つの指標を設定した。そして、それに対応させて授業目標と内容を作成している。中でも指標5に「正しく、責任を持って意見を表明する方法を評価する」と評価能力を取り入れている点が注目される。これは、実践能力の育成には非常に重要な視点であることが経済界におけるコンピテンシー育成において強調されている「なぜ成功したのか、なぜ失敗したのか」の「概念化の学習」¹¹である。

<公民教育科 第7学年2学期 単元「民主主義の体現に向けて」A教諭授業計画>

- A. コンピテンシースタンダード：地方分権化時代の社会参加、国家の法律や法規、人権国家委員会、意見表明の自由および独立宣言や当初の組織の再構築について情報を探し、伝え、利用することが日常的にできる。
- B. 基礎コンピテンシー：1. 意見表明の自由について分析する。
2. 意見表明の自由に対してポジティブな態度をとる。
- C. 指標：1. 意見表明の自由の真理について説明する。
2. 意見表明の自由の制限の結果について学ぶ。
3. 制限なく、あるいは無責任に意見を表明する自由の結果について描く。
4. 自由にそして責任を持って意見を表明する権利を行使することに対してポジティブな態度を示す。
5. 正しく、責任を持って意見を表明する方法を評価する。

D. 授業目標：

1. 生徒は意見表明の自由の真理について説明できる。
2. 生徒は意見表明の自由の制限の結果について述べることができる。
3. 生徒は、制限なく、あるいは無責任に意見を表明する自由の結果について描くことができる。
4. 生徒は、意見表明の自由の法律の基本について同定できる。
5. 生徒は、社会の希望を伝える諸機関を同定できる。
6. 生徒は、自由にそして責任を持って意見を表明する権利を行使することに対してポジティブな態度を示すことができる。
7. 生徒は、正しく、責任を持って意見を表明する方法を評価することができる。

E. 学習内容：意見表明の自由

1. 意見表明自由の真理
2. 意見表明の自由の制限の結果
3. 制限なく、あるいは無責任に意見を表明する自由の結果
4. 自由にそして責任を持って意見を表明する権利を行使することに対してポジティブな態度
5. 正しく、責任を持って意見を表明する方法

F. 授業方法：ディスカッション、観察、シミュレーション

G. 教授ストラテジー：

第1回 導入（10分：挨拶、出欠確認、生徒の学習動機付け、学習到達目標と指標についての説明、学習活動内での自主性とやる気の問題に関連する事柄の話）、主要活動（70分：10分間教科書を読み、その後で生徒がクラスの前で意見表明の実際について説明する。意見表明の自由についてディスカッションする。）、終了時（意見表明の自由の真理について生徒とともにまとめる、筆記テスト、今後の学習活動について知らせる）。

第2回 導入（10分：挨拶、出欠確認、生徒の学習動機付け、学習到達目標と指標についての説明）、主要活動（70分：グループに分かれ、法律の基本、社会の希望を伝える諸機関を見つける、グループ発表する）、終了時（10分：生徒と共に学習内容をまとめる、今後の学習活動について知らせる）。

第3回 導入（10分：挨拶、出欠確認、生徒の学習動機付け、学習到達目標と指標についての説明）、主要活動（70分：グループに分かれ、意見表明の自由の制限の結果、制限なく、あるいは無責任に意見を表明する自由の結果についての教材についてディスカッションする。グループ発表する）、終了時（10分：生徒と共に学習内容をまとめる、今後の学習活動について知らせる）。

第4回 導入（10分：挨拶、出欠確認、生徒の学習動機付け、学習到達目標と指

標についての説明)、主要活動(70分:グループに分かれ、各グループは学級委員会や生徒会の活動などのポートフォリオ報告の中で、自由に責任のある方法で意見表明する権利の使用に対してコメントする)、終了時(生徒とディスカッションを振り返る。正しく、責任ある方法で意見を表明する方法に関係する記事を準備する課題を提示する)。

第5回 導入(挨拶、動機付け、学習到達目標お指標の伝達)、主要活動(グループに分かれる。正しく、責任を持って意見を表明する方法を各グループでシミュレーションする)、終了時(互いに議論し、振り返る。個人課題)

H. 学習メディア:OHP リソース:教科書、1945年憲法、1998年第9号法、インターネット、法律書、新聞、雑誌など

I. 評価と対応:小テスト、ポートフォリオ、分析・説明、ループリック

次に学習内容を見ると、『手引き書』には、「意見表明の自由」とのみ記載されているが、教科書には、意見表明の自由に関するインドネシアの法律と歴史、世界人権宣言、政治家による意見表明のシステム、市民による意見表明のシステムと事例が取り上げられ、それらの事実を生徒はどう考えるかという問いも多く設定されている。教師はこれらの内容と設問を用いて、ディスカッションを中心に理解を深めるという子ども中心の教授学習、自己主導型学習ストラテジーを設定している。導入時には、動機付けをまず行い、生徒は単元・授業の学習目標は何か、それを図る指標は何かを理解して学習を始めるようにしている。そして評価方法としては、ポートフォリオ、ループリックなど、「真正の評価」を目指しており、効果的に生徒にコンピテンシーを身につけさせるために、ループリックや自己主導型学習など最新の実践・研究の成果を取り入れる点において柔軟である¹²。

3. 国立第11中学校における授業実践事例

(1)「民主主義の体現にむけて一第5回:デモ実践発表」授業¹³

先に述べたようにコンピテンシーの特徴は、保有能力である知識、技能、態度そのものより、パフォーマンスを規定する動機、使命感、性格、特性、信念、価値観を重視し、それらを総合して成果をあげる行動特性を示す点にある。そこで、以下、「民主主義の体現にむけて一第5回:デモ実践発表」授業をみながら、実践能力と保有能力の違いをどのように意識して育てているのか。実社会をどのように教室内で模倣するのか。「真正の評価」(「大人が仕事の間や市民生活の間、個人的な生活の間で『試されている』、その文脈を模写」しつつ行う評価)にむけてどのような学習活動および評価を行うのかを分析する。

①導入(挨拶、動機付け、授業目標の伝達)

教師「あなたたちが実際に社会に対して何か意見を言いたい時にどうすればよいかとい

う練習です。意見表明の方法としてこれまで4つを勉強しましたね」いろいろとヒントを出しながら4つについて生徒から聞き出す「何が問題で、何を訴えたいのか、簡潔にまとめてボードに効果的に示さなければなりませんね。そして、人々が分かり易いように、そして安全で正しい方法で行わなければなりませんね。これらの点をしっかり押さえて、今日は真剣に意見表明を行ってください。発表以外のグループは、この評価シートを使ってどのように行われるのか、しっかり評価してください。友達の意見表明を評価しながら、自分たちはどこをどういう風に改善すべきかも考えるようにしてね」評価シートには、4項目（方法、集団性、真剣さ、創造性）が示され、4段階評価（大変よい、よい、あまりよくない、よくない）を行うようにされている。

②主要活動（グループに分かれて意見表明のシミュレーション）

教師：（物理的空間設定）「デモンストレーションをする時には、まず警察に行って許可を得る必要があるわね。私が警察署の役をするから、まずはここからはじめてくださいね。次にデモンストレーションに関係の深い場所を設定しておきますね。大統領官邸、空港、病院、内務省（といいながら教室の前方と後方に名前を表記した紙を置いて、場所を設定する）。さあ、どうぞ。」

グループ1：環境破壊と人権問題についてのデモンストレーションを行う。デモの許可を得るために警察署に行き、諸注意を受ける。真剣な面持ちでプラカードを掲げて大統領官邸、空港、裁判所を回り、教室前方にて、意見表明を行う。その後ボードを掲げて歌を歌いながら、教室を回る。

③終了時（ピア評価、振り返り、教師のコメント）

教師：「さあ、二つのグループに今日は発表してもらいました。みんなの評価はどうでしょうか。評価シートを見ながら、よかったところ、改善点を述べてください。シートの評価指標以外のことでも気が付いたことがあれば付け足してくださいね。はいでは、はじめましょう。グループ3の人から」

グループ3：「方法は、良かったです。教室に設定された場所に適切に行って、すべきことができていました。集団性も良かったです。一つの集団としてデモが行えていました。創造性は、とても良かったです。表明者の意見に合わせて時折効果的に大声で強調していましたし、ボードの使い方も大変うまかったです。」

グループ1：友達の評価に対して礼を述べ、批評についてのコメントを述べる。

教師：グループ2の発表についての評価も各グループから聞く。すべて終わったところで、ホワイトボードに評価点数を書き入れ、総合得点を示す。得点の高かったグループを賞賛するように促し、褒賞として歌を歌ってもらうように促す。クラスの興奮が少しおさまってから、プレゼンテーションに対するコメントを行う。「みんなは、方法についてはくよかったと評価していましたが、本当にそうですか？警察署に行く時には、デモについてレポートにまとめて提出するはずでしたが、受け取りませんで

したよ。ねー。大切なことを忘れていましたねえ。」また、同時に素晴らしい点についても賞賛し、次に発表するグループに指示を出す。

授業は、生徒たちが発表したり、意見を述べたりする時間が圧倒的に多く、生き生きと楽しそうに、そして真剣に取り組んでいる様子が伺えた。また、教師も注意深く生徒を見守っている様子で、言葉を選んで、タイミングを見計らって助言をしている様子が伺えた。

(2)教師による Competency Based Curriculum 実践評価

授業観察後、実践（準備、実践、評価）において、教師が困難と感じるところや工夫している点、コンピテンシーを基盤とするカリキュラムを採用することによって変化した点について、教師らにインタビューを行った¹⁴。

質問 1. 教える際に難しいと感じること、特に工夫しているところはありますか。

B教諭回答「コンピテンシーを育成するには、教授法も評価法も一つじゃないところです。2週間の研修期間中に20以上の参加型学習方法を学んで、トレーニングを受けました。毎日の授業でどの方法が最も適切か選んでいます」

C教諭「持っている知識や技能を実際に使える力に高められるかどうかは、やる気、動機の強さなんです。このやる気をどう高めるかが一番難しい。生徒には夢を聞きます。将来の自分の夢や理想像を描くことでやる気をもたせようと。でも現実離れた夢を語るばかりで、日々の学習との関連性については全く無頓着なんですよ」

質問 2. 評価において難しいところはなんでしょうか。日本では評価基準と評価規準を定める必要があるとされていますし、インドネシアの教師も一人一人に詳細な評価を記述式で書くのは不可能だとの不満を聞きますが、どうですか。

B教諭「あまり細かく決めて、その通りにしようとする和不自然な授業になるので、気をつけています」「評価は、簡単にすべき。何を評価すべきなのは、ベテラン教師は把握しているし、どの程度向上したかも様々な場面を通して把握できる。細かい評価は、力のない教師が訓練するための道具のようなものと思います」

A教諭回答「中学校段階では、ピア評価で評価規準を用いるのは不可能でしょう。大体、いいか悪いか分かる程度でいいんです。その評価がずれている時に教師が評価のポイントを押さえるようにすればいい。大切なのは、仲間を評価することで自己評価能力を身につけ、自分のコンピテンシー向上に注意を向けることなんです」「以前の評価は、一つの答えを選択させる、あるいは書かせるだけでした。でも今は、どのように考えたか、どうしてこの答えなのかも含めて思考プロセスをも含めて口頭で答え、それを人に伝えられるかを評価します。それがコンピテンシーなんです。中学校では、ポートフォリオの作成はやる気を起こさせ、生徒も自分の価値観の変化、知識が増えていく過程、資料収集や発表を通して技術を学び、積極的に自発的な学習態度を少しずつ獲得していきます。」

質問3. 保有能力を実践能力まで高めることは可能ですか。

A教諭回答「今日の授業でも、意見表明が自由にできることは素晴らしいことだと学びました。そして、過去および現在の意見表明の自由による効用と課題の学習を通して適切な表明方法も学びました。最後に自分たちは今一体何を社会に対して訴えたいのかを考え、まとめ、仲間に適切な方法で意見表明をするという活動を行いました。そして相互に評価することでよりよい意見表明について学び合いました。この繰り返しこそが実践能力を高めることになるんだと思っています。」

質問4. Competency Based curriculum を実施することで授業への取組や自分自身の変化はありましたか。

A教諭回答「以前のパンチャシラと公民教育科と違うのは、民主主義を実現するための市民の資質や能力を備えさせることを強く意識するようになったこと。教師が何かを“教える”のではなくて、生徒が“学び、実行できる”のを支援するように変わったことです」「生徒に身につけさせるコンピテンシーを明確に捉え、生徒にも伝えることから、学習成果とその社会での通用性を強く意識することによって効力感、責任感を強く感じるようになりました」

C教諭回答「Competency Based curriculum になってから、とにかく、楽しい！教えることがこんなに楽しく感じられたのははじめてです。もちろんこの方法が性格に合わないという同僚もいます。けれど、私にはぴったり。授業は活気的になり、生徒たちと気持ちを通じ合っているのが実感できます」「以前は、1から4まで教えるべきことがあれば、1から順に教えていました。でも、今は生徒が何を知っていて、何を知らないか。何を知ることから始めたらよいのかを掴んでから順番を変えたり、時間配分を変えたりします」

以上みてきたように、Competency Based Curriculum の授業実践においては、動機付け→知識の獲得→知識の活用→課題の実践の流れが、年間の学習内容の順序、単元構成において作られているという点が最も示唆に富むものであった。

今回取り上げた単元の二つ前の単元において、生徒らは基礎コンピテンシー「諸法規を分析できる」の中で、市民の要求に答えられていない諸法規に対する批判的分析を行うことが学習されており、一つ前の単元では基礎コンピテンシー「人権国家委員会について説明できる」において、世界や自国の人権問題について考え、それぞれの意見を持つところまでポートフォリオを使って学習を進めていた。まず社会に対する強い批判、意見、それを自分も伝えたいという動機や社会を変えなければという強い使命感を持たせ、次いで意見表明に関する歴史や行政のしくみについての知識を獲得し、「意見表明の自由について分析出来る」「意見表明の自由に対してポジティブな態度をとる」という基礎コンピテンシーの育成につなげている。A教師はこの二つの基礎コンピテンシーをさらに「意見表明

を行うことができる」という高次のレベルに設定した。これまでの学習を活かして、自分たちは今社会に対して何を訴えたいのかをまとめ、意見表明の練習を行い、教室を社会に見立てて効果的にかつ正しい方法でデモンストレーションするという学習へとつなげている。学んだことが次の学びにつながることに、そしてそれを社会参加につなげられるということが実感できるような仕組みにしているのである。そのため教師も実践の効力感を持ち、生徒たちは生き生きとして、自発的な学びを楽しんでいるように思われる。この教授学習過程の繰り返しによって保有能力から実践能力への転換が可能となるのではないだろうか。

おわりに

インドネシアにおける Competency Based Curriculum の実施には未だ課題も多く残されている。これまで発表者が面接調査を行ってきた中でも、教師らは一様に Competency Based Curriculum を理想的には素晴らしいと賞賛するものの、実践は非常に難しいと答えている。制度上の最大の課題は、全国統一試験がまだコンピテンシー基盤として作成されたものではないことである。この点についての保護者や教師の不満やとまどいは大きい。また、僻地学校や農村の学校での環境の劣悪さから学校教育の改善に至らない場合も多い。しかし、今回の発表で示したように、社会で必要な実践能力として国家がコンピテンシー基準を明確に示し、カリキュラム開発原則を設定している点において、教師も生徒もコンピテンシーを基盤として開発された学習に有効性を感じ、効果があがっているようである。生徒からの「なんでこんなことを勉強しないといけないの」という問い、教師の「試験に出るから」「進学のため」という応答がなくなり、双方が学びから社会への道筋をしっかりとイメージできるのである。今後は、さらに他国における Competency Based Curriculum に類する授業実践に関する研究を進め、コンピテンシーを基盤とするカリキュラム開発モデルを構築していきたい。

注

- 1 本研究は、文部科学省科学研究費補助金（(若手研究(B)) 課題番号17730457、平成17年度～19年度）の助成を得て実施した研究成果の一部である。
- 2 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会（第27回：第3期第13回）。「生きる力」の育成という大目的を具体化するためには、そのための道筋を明確にし、共有する必要があると考えるが、例えば、OECD のキー・コンピテンシーなどの例も参考に、「生きる力」を育成するための主要例として、「主体性」、「自己と他者との関係」、「個人と社会との関係」を育成するとの整理についてどう考えるか。」が審議されている。
- 3 わが国の場合、コンピテンシーという概念を基盤として学習指導要領が編成されていないため、教

- 育目標の明確さや具体化において問題がある点についてこれまで指摘してきた。二宮皓、金龍哲、中矢礼美、大野亜由未、下村智子、田口明子「Cross-Cultural Competence に関する基礎的研究」中国四国教育学会『教育学研究紀要』vol.49、2003年、231-242頁。二宮皓、中矢礼美、下村智子、佐藤仁「Competency-Based Curriculum に関する比較研究」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』vol.13、2004年、45-59頁。二宮皓、中矢礼美、出口真弓「Cross-Cultural Competency を育成するカリキュラムの開発と検証」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』vol.14、2005年、89-102頁、二宮皓、中矢礼美「国際理解教育カリキュラム開発方法論—Competency Based Curriculum 論からのアプローチ—」『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究 第2分冊』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)研究成果報告書 研究課題番号15330195)平成18年5月。
- 4 旺文社教育情報センター「教育における“コンピテンシー”について」平成17年10月。「10年ほど前に打ち立てられた「生きる力」と OECD の「キー・コンピテンシー」とを読み比べると、基本的には“同根”であるようだ。したがって、教育観としては、OECD の「キー・コンピテンシー」にある活用能力等も含め、これまでの「生きる力」を人材育成の基本に据えることに変わりはないとみる」としている。
 - 5 Bowden, John A., “Competency-Based Education — Neither a Panacea nor Pariah”, a paper on proceedings, *Higher Colleges of Technology's International Conference on Technological Education and National Development*, 2000.
 - 6 OECD の PISA はキー・コンピテンシーの構造については示しているが、それを育成するためのカリキュラムや育成方法についての研究は現在研究過程にある。The Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations (DeSeCo) Project が進められ、PISA の開発に役立てられた。その成果は、Dominique Simone Rychen, Laura Hersh Salganik (edit), *Key Competencies*, OECD, Hogrefe&Huber Publishers, 2003.
 - 7 Pusat Kurikulum, Balitbang Depdikbut, *Kurikulum Hasil Belajar: Kurikulum Berbasis Kompetensi*, Agustus 2002, p. 10.
 - 8 Departmen Pendidikan Nasional, Direktorat Jenderal Pendidikan Dasar dan Menengah, Direktorat Pendidikan Lanjutan Pertama, “Pedoman Khusus Kurikulum 2004 Sekolah Menengah Pertama, Jakarta, 2004. 各教科別に発行されている。
 - 9 Pusat Kurikulum, Balitbang Depdikbut, *Kurikulum Hasil Belajar: Kurikulum Berbasis Kompetensi*, Agustus 2002, p. 10.
 - 10 Depdiknas, Kurikulum 2004 Sekolah Menengah Pertama Pedoman Khusus, Pengembangan Sistem Penilaian Berbasis Kompetensi Sekolah Menengah Pertama: Mata Pelajaran Pendidikan Kewarga negaraan, Japakrta, 2004.
 - 11 古川久敬編著『コンピテンシーラーニング』、日本能率協会マネジメントセンター、2002年。
 - 12 わが国においてもこのような学びの転換の必要性を指摘する研究者も多い。西岡は、「学習指導要領

が主に領域概念によって目標規定を行っているのに対し、指導要録においては能力概念によって目標規定が行われている。両者をどう統合して実践するか」という指摘をしている¹²。そしてこの問題に対する学校の対策は、領域ごとに毎に区切られた各単元において指導要録の各観点に対応する目標＝評価規準を設定する形がとられているが、そこには目標の細分化、長期的目標の抜け落ち、評価基準作成の不明瞭さなどを上げ、ルーブリックの開発を提案している。

- 13 ジャカルタ国立第11中学校での授業観察（2006年3月3日）。
- 14 ジャカルタ国立第11中学校の3人の教師に対するインタビュー（2006年3月3日）。A教師は、先にあげた授業実践の授業者。B教師は、教員評価において高い評価を得ているため、学校および州レベルの研修会のトレーナーになるよう、国レベルのCBC研修も受けている。A教諭は積極的にB教師から学び、お互いに尊敬しあっている。